
かみさま

冷泉晃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

かみさま

【Nコード】

N9171Y

【作者名】

冷泉晃

【あらすじ】

少年少女の成長の記録、そしてそれを見守ったある偶像のお話。

陽炎がじりじりと地面に燃え、蟬たちがやかましく騒いでいる。そんな喧騒は子供たちにも飛び火し、立ち並ぶ家屋の中ぽっかりと空いた領域　いわゆる空き地にて、無邪気な笑顔をこれでもかと振りまきながら少年少女たちは夢を背にのせ走っている。

ここで、いいかな。

はあはあと息を切らしながら、とある少年がやってきた。そこは空き地のすぐ裏手にある、小さな空間。何故かそこだけは、周りの騒音に邪魔されない静かな空間があった。

少年は純朴そうな顔で、純粹そうな瞳である一点を見つめる。

マタアシタ。

何故かその壁にはそう書いてある。古い木でできた壁に、何者かが彫刻刀などで彫ったのであろう。その彫った文字の溝さえも、もう変色してしまっている。

また、明日。

少年は前から気になっていた。これは一体、何なのだろう。誰が彫ったものか。

しかしながら少年は、この場所の、この謎の文字がどこか好きだった。

「ユウコ！　今誰がオニや！」

いかにも腕白そうなツラをした、体格の良さげな少年。額の汗が、健康的に焼けた肌の上をきらりと伝う。少年は空き地の隅にある茂みの陰からひよいと顔を出し、もひとつ向こうの木陰で休らう少女に声をかけた。

「わからない。でも、多分ウララだよ」

ユウコと呼ばれた少女は木に体をあずけながら笑って応えた。少女の頭には麦わらが被せられ、その下には薄い色のワンピース状の衣服がふわりとたたずむ。そのせいか、どこか異国情緒の漂う少女となっている。

「やばい、隠れる！」

少年が何かを察知してそう言うやいなや、二人は息を合わせたようにひよいと隠れてしまった。慣れたものである。

彼らが隠れる空き地の前を、すたつと人影が走りすぎる。黒々とした髪をなびかせて走り去ったその影は、すぐ角を折れて右へ入った。彼女がそのオニである。ちよつと行くと、住居と住居の隙間に子供なら通れなくもないほどの細い通路が続いている。彼女は足を止め、空気を吸い込んでひとつ深呼吸をしてから、何か決意したようにその通路に入ってしまった。少し苦勞しながらも、あつという間に奥までたどり着く。するとまたそこから左に折れて

そうこうしていると、細道は終わりやつと広い空間へ出る。するとそこには、何も知らない少年がぼつねんと突っ立っていた。

「はいタッチ！」

「うええ！？ ウララ！ どうしてここが！」

少年は、自分しか知るはずのないこのお気に入りの空間に気づかぬ内に侵入され、焦りを隠せないでいる。

「知ってるよ、サトルがいつもあつこからいなくなるの」

ウララは知っていた。サトル少年がいつもかくれんぼで勝利を収めるその理由を。いつもあの辺りからサトルが細い道へ入っていくのをちらりと見ていたのだが、その度に、自分もついて行って確かめるだけの勇気が無かった。今日はその勇気をちよつと振り絞れたというだけの話である。

「うげえ」

サトルは残念そうに洩らした。

「でも、こんな所あつたんだ。知らなかった」

ウララは改めてその場を見回す。妙な空間である。空き地からは

とても近い位置にあるくせに、直接行くことはできない。迂回して、細い通路をずうっと通って初めてたどり着けるのだ。そこだけがまるで別世界のように思えてくる。

「ちえ、俺の秘密の場所だったのに」

「でもいいじゃん、これからは四人の秘密にしようよ」

「勝手に人増やすなよ。そんないっぱい来たら落ち着かねえよ。」

俺にとつて、ここが一番落ち着く場所だから」

サトルは、年齢不相応な感慨深い顔をして「マタアシタ」を見つめた。

「確かに、なんか静かで良いところだね」

ウララもかくれんぼのことを忘れて落ち着いてしまっている。

だろ、とサトルは横目でウララを見やりながら、空を見上げた。遠くの方で鳥の群れが飛んでいく。真一文字に横切つて。

ここは、四人の秘密の場所。

まだここを知らない二人　ユウコとリョウヘイ　にどう紹介してやるうかと、サトルは考えを巡らせ始めた。

翌朝。澄んだ空気が空をどこまでも満たし、陽の光が遠慮なくアスファルトに照りつける。まさに夏模様の朝である。昨日かくれんぼをしたあの四人が、各々赤と黒のランドセルを背負つてとある十字路で集まっている。そこに至るまではサトル、ウララ、リョウヘイの三人が他愛のない話に花を咲かせながら歩いてきたのだが、ひとり家の方向の違うユウコはここで三人と合流することになるのだ。といっても、またその他愛ない話に、もつと大輪の花を咲かせることになるだけなのだが、しかして、そんな時間に限って楽しいものである。

「ユウコ、俺な、三面までノーマスで行ってん！　すごいやる！」

「ほんと？　すごい、リョウヘイクン」

「ちょっとリヨウヘイ、自慢ばかりやめてよ」

「ウララは一面も越されへんもんな」

「なによ、あれめっちゃ難しいじゃない」

「サトルはどこまでいったん？」

「俺？ まだ二面の途中」

いつの間にかみんなゲームの話題で盛り上がっていたらしい。ぼうつとしていたサトルは、少し話に乗り遅れていた。

「まだまだあかなサトル。俺三面までノーマスやで、ノーマス」

「リヨウヘイうるさい！ さっきも聞いたからそれ」

「一面も越されへん奴が怒んなよう」

「まあまあ、二人とも」

ユウコだけは、なんだか話に巻き込まれているといった感じに見える。サトルはユウコを少し不憫に思った。それでもリヨウヘイはよくユウコにしゃべりかける。なかなか迷惑なことだ。

昨日のかくれんぼの後、サトルはウララに促されて残りの二人を「例の場所」に連れていった。リヨウヘイはその道中は探検気分を楽しそうだったが、着いてみればそこは何もないただの空間である。つまらなさそうに、なあんや、何にもないやん、と肩を落としてしまった。一方のユウコはどうやら気に入ったらしい。例のあの「マタアシタ」を見ながら、また明日ね、などと文字に話しかけていた。おかしな子である。サトルは、三人もの闖入者を迎え入れてしまった割には何も不快な感じはせず、そこにいてだけでやはり上手く脱力して心から落ち着くことができた。その場所には何か不思議な力があるのかもしれない。

どうにも三人の話にうまく乗れない。それほどゲームにのめり込んでいないせいだろうか、サトルはまたぼうつと視線を向こうに漂わせ、いつもの見慣れた景色を眺めていると、道路の後方を歩く別の集団の声が聞こえた。この時間帯は登校する生徒が多い。

何かさ、近いうちに誰かこの学校から転校するらしいよ。

ええー、誰だよそれ。

分かんない。ただ、何か職員室の前で先生が引越しの準備とか、そんな話してたから。

それって教師の誰かが引越す話とかじゃねーの？

いや、そんなんじゃないっぽかった。

何だか、そんな会話だけが途切れ途切れに聞こえてきた。そんなことサトルも知らなかった。いったい誰が転校するのだろうか。少し不安になる。でも、それはそれで家族の事情とかそういう事があるのだから仕方ないとも思った。ふと横の三人を見てみるが、まだゲームの話が尽きないらしく、今の転校の話は聞こえていないらしかった。自分だけが聞こえてしまったというのも、何だか嫌な感じである。

そうこうしているうちに、緑の葉を纏った樹々たちの間から校舎の一部が見えてくる。サトルたちの通う小学校は市内でも若干古い校舎で、よくいえば伝統のある学校である。

「やっぱり装備はな、攻撃中心やねんで」

「へえ、すごいねえ」

「もうやらない！ あんなゲーム」

生徒たちが校庭を行くのを、穏やかな風がそつと撫でた。こうして、彼らの雑多な日常の一頁が幕を開ける。

昼休みを知らせる鐘が鳴った。すると自然とサトル、ウララ、リヨウヘイの三人が集まっておしゃべりを始める。いつもはこうやって話をするか、外で遊ぶかのどちらかである。

「あれ、ユウコは？」

「なんか先生に呼ばれてるみたい。なんかの委員で手伝ってんじゃないかな」

「あ、そう」

リヨウヘイはそう洩らすと廊下の方をちらりと見た。数人の生徒がそこを駆け抜ける足音が聞こえた。

サトルは今朝聞いた話を持ち出す。

「転校の話知ってる？」

「転校？ 誰が？」

「サトルお前転校すんのか！？」

「いや、俺じゃなくて……その、誰かが」

「何よそれ」

ウララは遠慮なくそこらの机にどつと腰掛けた。

「俺も聞いた話だからよく知らないけど。リヨウヘイなんか知ってる？」

「ん、いやあ知らんけどな……」

リヨウヘイは腕を組んで考える仕草をする。

「うちのクラスなの、それ」

「いや、ほんとに分かんない。聞いた話だから」

「聞いた話ってなによ、もつとちゃんと聞いといてよ」

「その聞いたってか、たまたま聞こえたっていうか」

「ふうん、変なの」

何が変なのかよくわからないが、ウララはそう言っただけ足をばたつかせた。

そこに、ウララの後ろから女子生徒がやってきて、そこ、私のと声をかけた。あ、ごめんとウララは机を降り、さっさと手で払った。そしてはにかんだように笑った。その仕草が何故かゆっくり見えた。

「そんなことより！」

外では蝉がうるさく鳴いているのに、それ以上にこの少女の声はやかましい。

「こんど池に行こうよ！」

なんとも唐突である。

「池？ あそこって子供だけで行っちゃだめなところだろ」

「男がそんなこと言ってどーすんのよ！ ほらみんなで釣りしようよ」

「釣りか、ええな！ 俺も釣りしたい！」

リヨウヘイも乗り気である。またサトルだけ取り残された。

「ねえ知ってる？ あの池にはね、又シがいるんだよ」

「又シ？」

リヨウヘイは目を輝かせ、サトルは胡散臭そうに話に入る。ウララは両手を目一杯広げて、

「こおんなにおっきいの。それを見てみたい、捕まえたいの！」

本当に野性的な女子だ。リヨウヘイもそれを聞いて興奮したのか、ウララの話を聞きながらすげーとかほんまに？ などと繰り返している。

「でも釣竿とかはどうすんだよ」

「あ、そっか」

ぽかんと何か抜けてしまったかのように、二人は落ち着いてしまった。

「俺ん家にあるのは銚もりぐらいやしな」

「モリあるの！？ それでいいじゃん」

「あかん、おとんが絶対触ったらあかん！ ゆうて貸してくれへん」

「えー、オトンのけちんぼ」

べえと舌を出してみせるウララ。ウララは相変わらず元気で活潑な少女である。

しかし。

「まあとにかく今度 大人には秘密で みんなで池に行こう！

ユウコも誘ってさ」

「おう、俺は行くで」

「サトルも行くよね？」

え。

「行こ」

なんだか最近、ウララと目を合わせられないでいる。昔はすぐに、行こう！ と答えられたのに、今となつては何故か答えるのにためらってしまう。

彼女の視線。彼女の顔つき。彼女の言葉。彼女の、こころ？

「え、ええと」

「何を迷ってんねん！ 男なら行くやるそこは」

「男とか女とかカンケーねえし」

リヨウヘイには面と向かって言える。というか逆にリヨウヘイに当たっているのだろう。

「そうだよリヨウヘイ、そういうのサベツっていうんだよー」

意外にもウララが加勢する。

「なんやねん、別に変なこと言ってるやろ！」

なんだか二人が言い争いというか、口喧嘩のようなものを始めてしまったので、話はそれでうやむやになってしまった。

別に迷うことなんてなかった。サトルは池に行ってみたかった。でも、どうしてかためらってしまった。サトルは自分自身のそんな感情を、なかなか理解できなかった。

昼休みももうすぐ終わる。サトルはこの時間を無駄に使ってしまったような後悔にとらわれた。

1 - 1 (後書き)

いちおう初の連載です。どこまで続くかわからん……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9171y/>

かみさま

2011年11月27日14時46分発行